

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「アジア文字研究基盤の構築 1：文字学に関する用語・概念の研究」（平成 30 年度第 1 回研究会）

日時：平成 30 年 5 月 26 日（土曜日）午後 13 時 30 分より午後 17 時、5 月 27 日（日曜日）午前 8 時 30 分より午後 15 時

場所：AA 研マルチメディア室（304）

報告者名（所属）

5月26日

1) 荒川慎太郎（AA研所員）

「プロジェクトの進行状況について」

(On the joint-research project)

今年度の活動計画を説明・検討するとともに、来年度（平成 31 年度）に開催を企画している公開展示について試案を示した。

2) 落合淳思（AA 研共同研究員，立命館大学）

「甲骨文字の特殊性」

(Specificity of the oracle bones inscription)

甲骨文字はまとまった数量があるものとしては最古の漢字資料であり，後代の漢字との類似点も多い。しかし，字形・文法・表記法には後代と比較して特殊な点も見られる。字形の特殊性として，多様な異体字の併用や左右反転字・合文の多用などがある。文法の特殊性として，倒置や省略の多用，助字の少なさなどが挙げられる。表記法の特殊性として，左行文と右行文の併用や特異な行の移行などがある。

3) 荒川慎太郎（AA 研所員）

「西夏文字研究からみた文字学用語」

(Terms of studies on scripts from the studies on the Tangut script)

「単純字が少ない」「象形性を欠く」など，文字の類型的にも興味深い，西夏文字の字形と構成の特徴を概説した。「文字配置の象形性」「反切造字」「線条性」「筆画」など，文字学に関係する術語を検討する際，西夏文字とその研究がどのように貢献できるかも紹介した。

5月27日

4) 全員

特に第2回研究会の企画構成に関する打ち合わせを行った。

5) 大竹昌巳（AA 研共同研究員，日本学術振興会・東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

「契丹文字の文字組織」

(The writing system of the Khitan scripts)

契丹小字を中心に，その文字体系の特徴について概説した。まず表現面に関しては，統字論的特徴として書字方向等について，形字論的特徴として字素の排列規則とその例外について，字素論的特徴として字素目録や字形的特徴，識別符号等について扱った。また内容面に関しては，字素の字価による分類，綴字法，漢語声調の特殊表記等について扱い，最後に VC 型主体の音節文字体系という類型論的に稀な文字体系を契丹人が創製した理由を，契丹語の音韻的・文法的特徴と絡めて説明した。

6) 笹原 宏之 (AA 研共同研究員, 早稲田大学)

「日本製漢字の変遷と位相」

(History and phase of Japanese-made kanji)

漢字と日本製漢字には造字法, 構成要素の選択, 字体融合, 表語機能などに性質の違いがあることを具体例により指摘し, 多様な表意的表記を生む日本製漢字に時代差 (変化), 地域差 (地理的変異), 位相差 (集団・場面的変異), 個人差なども見出しうる実例を紹介し, 合字などの用語についても検討した。